

感動的なものは倫理的

上 廣 榮 治

「ホッチキス」といえば、オフィスはもちろん家庭でも、日常生活の中に定着して久しい便利な文具です。そのメーカーとして知られる老舗マックスのホームページには、「心のホッチキス・ストリー」と名付けられたちよつと素敵なエピソードが掲載されています。この会社では、暮らしの中の、いつまでも心に留めておきたい思いや出来事を毎年募集し、選考し発表しているのです。今年で第五回を迎え、これまでの応募総数は一万九千を超えたといえます。以下、心に残ったいくつかをご紹介します。

まず、二十代の女性会社員の話です。その日、彼女は仕事でミスをし、憂鬱な気分であ路を急いでいました。そのせいか、心が苛立ち周りのすべてが神経に触りました。信号が赤ばかりだったり、道幅いっばいに広がって大声でしゃべる学生たちに道をはばまれたり……。

住まいのあるマンションに着いてエレベーターに乗り、扉が半分ほど閉まりかけたときです。「ゴメンナサイ」と言つて花束を抱えた同年代の女性が乗り込んできました。日本語がたどたどしいので留学生でしよう。それにしても、閉まりかけたエレベーターに乗ってくるなんてと、内心むしゃくしゃが募りまし

た。そのときです。真紅のバラが一輪、花束から抜き取られて差し出されました。

「一本。きょう、誕生日なの」

不意のことで戸惑いながらも、彼女は、「ありがとう。お誕生日なんです」と口にする、思わず笑顔になつている自分に気付きました。留学生らしき女性は「はい、ソナノデス。ありがとうございました」と微笑むとエレベーターを降りて、去っていきました。

扉が閉まったエレベーターの中で一人になった彼女は、今の出来事を反芻し、うれしくなり、退社してからずつと苛立っていた自分が恥ずかしくなりました。仕事でミスをし悲嘆にくれていた自分と、誕生日を喜んでいた彼女を比べて考えました。「喜怒哀楽の感情が高ぶると、人は普通、周囲が見えなくなるものなのに、彼女は違った。喜びにあふれた気持ちの中でも、偶然エレベーターに乗り合わせたに過ぎない私にも目を止め、気遣つてくれた」、そう思いました。

文章の結びに「彼女がくれた一輪のバラ。きつとこのバラが枯れても、この思い出は忘れない。私も彼女のよう、少しでも周りの人に目を向けられる、そんな人になりたい」と、この女性は書いています。

バラ一輪に喜びを託して差し出した女性にも、その喜びを素直に受け取り、見習いたいと思つた女性にも、人に対する素直なやさしさや共感、愛和の思いなどが感じられ、心がなごんできます。

次は、十七歳の女子高生が綴つたこんな話です。父親がよく仕事の帰りにケーキやアイスクリームを買つてきてくれるというのです。ところが、いつも、母と娘二人の分しかありません。そのわけを尋ねると、答えは決まつて「自分の分は要らんから買わんだけや」なのでした。娘二人は、それぞれ口づつ父親にあげる、いつの間にかそれがしきたりのようになっていました。この文章を書いたのは二人の娘の姉

のほうです。彼女はある夜、両親の会話を漏れ聞きます。

「今日も一口くれたで、俺に」

「うちには、ええ子が二人産まれてきてくれたなあ」

どちらも嬉しそうな声でした。この会話を耳にしたときのことを、彼女は「私は一生忘れないだろう」と書き、「今日もお父さんは帰ってくるだろうか。一つ足りないお菓子の入った箱を抱えて」と続けます。一つ足りないことよって分け合う喜びを味わう家族。ほのほのとした家庭愛和の姿です。

最後のエピソードは、夫にプロポーズされたときの言葉から始まります。

「絶対幸せにするから、結婚してください」

こう申し込まれた彼女は「はい」と答えました。結婚して三十年が過ぎた時、妻は夫に「あの時言っていた幸せって、この程度の幸せだったのね。あーあ、だまされた、だまされた」とぼやいたそうです。すかさず夫は「大丈夫、大丈夫。俺には、大器晩成たいきばんせいの相が出るんだ。幸せにするのは、これから、これから！」と言いつ返しといます。

その後まもなく、夫は病に倒れて亡くなりました。残された妻は、「五十二歳の若さで逝ってしまうなんて、あーあ、だまされた、だまされた。私を幸せにするっていう約束は、どうしてくれるのよ！ 大うそつき！」と、来る日も来る日も亡き夫に悪態をつきながら暮らしているといい、その理由を打ち明けています。「死んだ者の悪口を言うのは、かなり気が引けるのだが、あなたが怒って、化けて出てきてくれるのを待っている。オバケでもいい。あなたに会いたい」

会いたい。会いたいからこそ、怒らせようと、あえて悪口を重ねる。その心情が読み取れます。しかし、夫は夢にさえ現れません。すると彼女は「きつと、成仏じょうぶつできたのね。それならそれで、私はうれしい」と。ここでエピソードは終わっています。

この話の続きは容易に想像できます。なぜなら、いつも仲よく口喧嘩くちげんかしてきた二人だからです。もしもいつか、亡き夫が夢に出てきたら、もちろん妻は喜ぶでしょう。そして、「まだ成仏できていなかったのね。私を幸せにするっていう約束、今度こそ果たしてね」と言うはず。それに対して、妻の夢枕に立った夫は「俺は、成仏だって大器晩成たいきばんせいだ」などとうそぶくのではないのでしょうか。憎まれ口を叩き合うことで愛和を確かめ合ってきた夫婦のようすが目に浮かびます。

この三つの「心のホツチキス・ストーリー」に共通するものとは何でしょう。もう、皆さんはお気づきのように、人と人との「愛和」です。

実は、人が感動する「いい話」には、必ず倫理が潜ひそんでいるのです。つまり、「感動」とは、人が生まれながらに持っている倫理的な感性に共感することだといつてよいでしょう。倫理的な感性、なかでも「愛和」は倫理方の中心的なものです。だからこそ、この言葉で表現できるエピソードは、世間に星の数ほどあり、私たちを元気づけてくれるのです。

しかし、世間は「愛和」という言葉を知りませんから、それを殊更ことごとに取り出して重視することはありません。だからこそ、私たちが会友は、互いに相手を思いやって和す人間本来のこの美徳を重視し、それを「愛和」と名付け、実践の目標としてさらに増進しようとしているのです。

先ほど、感動的な話には、必ず倫理が潜むと申しましたが、倫理を実践して生きることこそ、最も感動の多い、仕合わせな人生なのです。真の実践は、常に感動をとまなうものなのです。